

悪人正機

安藤文雄

親鸞が本願の正機として自覚的に人間存在を確かめてくるとき、その表現は多岐に渡るが、そこに「貫しているのは「悪人」ということである。確かに本願は「十方衆生」「一切衆生」に平等に関わったこととして説かれるが、その教説が具体的に聞かれる地平は罪悪に苦悩する人間現実である。そこに救済教として伝承されてきた浄土教の具体性がある。

しかしこのことはまた同時に浄土教に、またその伝承において法然によって独立した浄土宗への疑難に顕著な批判として、その基底を貫く問題でもある。仏教界において浄土教は方便教・寓宗という位置に置かれてきた。自覚自証を前提として、断惑証理・廃悪修善の実践を正統とする仏教において、浄土教はその実践道から洩れ落ち、敗退していく者のために仮りに説かれた教えであり、正統の仏教の枠組みの中では浄土教はその最も低位のものに見なされてきた。仏教における機根の体系化、特に五十二位を中心とする菩薩道の階位の定着によって、機根の劣った存在に就いて説かれる劣った教えが浄土教であるとされてきた。もちろん、中国・日本の仏教の展開として歴史に表立ってきたのは大乘の仏教であり、大乘・一乗・仏乘ということが強調され、仏教が基本的に全ての存在に関わるものとして問題とされてきた。しかし修

道の実際においては「修行の久近」、機根の善悪が問われたのである。

法然によって、寓宗・方便教として位置づけられてきた浄土教が浄土宗なる一宗として独立したとき、法然が見定めていた視点は、この修道の実際に関わる問題であった。「選択集」教相章において、法然が道綽の『安樂集』の文によって「聖道・浄土」の二門の教相判釈の必然性として問うていることは、一般に小乗から大乘、三乗から一乗、顕教から密教という仏教教理の完全性への探求ではなく、修道の実際において、その行修の在り方そのものへの着眼である。法然は聖道門を一括して「断惑証理」「歴劫迂迴」ということにおいて「此の娑婆世界の中にして、四乗の道を修して、四乗の果を得」と確かめている。この表現は言葉にしてしまえば極めて当然のことがそのままに語られているのであるが、教理としては頓速一乗が語られながらも、修道の実際面においてそこに位階差別が必然する矛盾の指摘でもある。浄土教は仏教の正統の修道からすればその位階の最下位に位置する者、さらにはその位階から洩れる者において伝承されてきた。そこに寓宗・方便教という位置付けが必然した。

しかし法然の教相判釈は逆にそのような前提となっていない視点そのものを問うものである。それはまさに私たちが無前提に受け入れ形成している仏教観・宗教観を根本から問うているのである。断惑証理・廃悪修善の修道として常識となってきた仏教観、そこでは当然、人間への価値評価、条件、資格ということが問題となってくる。法然が聖道・浄土の教判として語ってくる仏道の選びは具体的には行の選びとして打ち出される。法然は善導の教言との値遇において、いかなる機根も選ばない行法としての選択本願

念仏ということを明らかに宣説した。法然は『選択集』本願章において称名念仏が如来選択本願の行であることを、勝劣・難易の二義によって確かめているが、その難易に関して、

故に知んぬ、念仏は易きが故に一切に通じ、諸行は難きが故に諸機に通ぜざること。然れば則ち一切衆生をして、平等に往生せしめんが為に、難を捨て易を取りて本願と為したまふか。若し夫れ造像起塔を以て、本願と為したまはば、則ち貧窮困乏の類は、定んで往生の望を絶たん。然るに富貴の者は少く、貧賤の者は甚だ多し。若し智慧高才を以て、本願と為したまはば、愚鈍下智の者は、定んで往生の望を絶たん。然るに智慧の者は少く、愚癡の者は甚だ多し。若し多聞多見を以て、本願と為したまはば、少聞少見の輩は、定んで往生の望を絶たん。然るに多聞の者は少く、少聞の者は甚だ多し。若し持戒持律を以て、本願と為したまはば、破戒無戒の人は、定んで往生の望を絶たん。然るに持戒の者は少く、破戒の者は甚だ多し。自余の諸行、之に準へて応に知るべし。当に知るべし、上の諸行等を以て、本願と為したまはば、往生を得る者は少く、往生せざる者は多からん。然れば則ち弥陀如来、法蔵比丘の昔、平等の慈悲に催されて、普く一切を撰せんが為に、造像・起塔等の諸行を以て往生の本願と為したまはず、唯称名念仏の一行を以て其の本願と為したまへり。

〔真宗聖教全書〕卷一、九四四頁

と述べている。ここに語られているのは仏教の修道における極めて具体的な問題である。それは法然が具体的に触れた現実からの問い返しなかで領れた選択本願である。各別の業縁において「諸機」として生きる、それが人間が生きているということの具体性であ

る。そのような存在に何らかの条件・資格づけが為されるならば、そこには当然その条件・資格から洩れる者が生れてくることは明らかである。しかもこのことは人が自ら選んだというよりも、歴史的社会的制約の中で強いられていることでもある。選択本願念仏ということの法然の確かめは、仏教が大乗を教理として標榜しながらも実際には現実の諸々の価値観のなかで差別的な機能をしているということの浮き彫りにしてゆく。法然が八宗のなか方便教として寓居していた浄土教を浄土宗なる一宗として独立させることの必然性は、時機の自覚、時機相応、機教相応という課題を軸にして仏教の在り方そのものを問うところに為された。「末法五濁悪世」の「一生造悪凡夫」という『選択集』教相章の『安樂集』による時機の確かめは、同時に選択本願念仏が時機相応の法であることの確かめである。それは時代と機根を慨嘆しているのではなく、時代と機根の選びなく成就する仏道こそが、本願念仏の法であり、そのことが明らかにする時機が「末法」「凡夫」として語られているのである。法然自身は「悪人正機」ということを直接に表立って語ることはないが、この時機ということの確かめからも浄土教の伝承にそのことを見ていたことが思われる。

法然が特にその時機の自覚を通して明らかにしてきたのは、時機の選びなく一切衆生の平等の行と成る選択本願念仏ということである。末法ということで法然が見定めているのは、行証をいふこととする仏教に行証がないという現実であった。それは法然自身にとって三学の修道を通しての絶望として実感的に領かれると共に、「断惑証理」「歴劫迂迴」という修道の性格からくる必然性として明示された。法然のこのような指摘は仏教における行ということへの根本的な問い返しを意味している。実際、浄土宗への疑

難の多くは称名念仏をめぐって為されている。断惑証理、廃悪修善を正統と自認する立場からすれば、称名念仏のみが仏道を決定する行であるということは独断的な謬説とされるのは当然であろう。そのことについて法然が答えるのは選択本願という一点においてである。それは行について人間の加える価値評価ではなく、人間の本来帰すべき根拠の問題である。そこでは人間における様々な価値評価、条件、資格を超えて、ただ仏願に順ずるか否かが問われるのである。しかしこのことは現実は何等かの具体的価値の上に自己存在を確かめている人間存在にとって決定的に困難なことである。法然が称名念仏を一切衆生平等往生の行として語る基点にある「彼の仏の本願の行」「不回向の行」ということには、人間の行為が仏道を決定するという断定への決定的な否定があるのである。以上、法然における行ということを検討してきたのであるが、法然が選択本願の行として称名念仏を明らかにしてくることで問われてくるのは何を根拠として生きるのかという人間の在り方そのものの問題である。そして私たちの日常の行為と存在性を具体的に決定してきているのが、善・悪の問題、善人・悪人ということである。

親鸞は『教行信証』において自身の回心を「雑行を棄てて本願に帰す」と表白している。法然の説く選択本願に帰した親鸞は自らを「愚禿」と名のることにおいて、本願によってのみ救われる人間存在を徹底的に擬視していった。法然による行の確かめは特に親鸞においては信心を課題的に問うことよって明らかにされていった。『教行信証』信巻以降において為される親鸞の思索において具体的な問題として取り掲げられてくるのが、悪人ということである。信巻では『浄土論註』の曇鸞の問いに端を発して、

善導の『観経疏』三心釈、源信の『往生要集』の文を踏まえて、『大経』十八願文の「至心・信樂・欲生」の三心の推求によって信心とは何かということが明らかにされていくのであるが、それは同時に「無有出離之縁」の身という存在現実への覚知と表離一体のこととして展開されていく。このことは親鸞が信心をどこまでも「本願力回向成就」として、人間における何らかの事柄ではなく、人間存在それ自身を成り立たしめることとして確かめてくることから必然する。親鸞がこの回向ということに関わって注目してきたのが、第十八願文における「唯除五逆誹謗正法」の一句である。この問題は信巻終わりの『涅槃経』による阿闍世の獲信、無根の信の表白によって端的に語られる。

信巻における信心の問題はさらに化身土巻において、「定散諸機各別の自力の心」として、「罪福信」「仏智疑惑」という『大経』の教説のもとに批判されていく。それは自らに善根を保持して自己を立てるという在り方、自力作善の否定である。今述べてきたことに一貫している問題性は、その表現は様々な形を取るとしても、一言で言えば謗法ということである。それは人間が一般に宗教心としていたる教法による自己正当化の問題であり、そのような在り方を自力の執心として否定し尽して、本願に誓われる「十方衆生」へと再生せしめていくところに親鸞が確かめてきた信心の問題があると思われる。その意味で親鸞の語る悪人とは無始以来の謗法存在への自覚的表白であり、本願によってのみ明らかにする人間存在への領ぎである。同時にそのことは様々の条件・資格の絶対化によって洩れていく存在、そのような意味での依り所を失った存在こそが本願の正機であることの証言となるであろう。